

青木文庫所蔵の戯単について

中塚, 亮
愛知淑徳大学 : 非常勤講師

<https://hdl.handle.net/2324/2344826>

出版情報 : “戯単、劇場與二十世紀上半葉的東亞演劇” 學術研討會論文集, pp.250-253, 2019-08-27. 九州大學言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :



青木文庫所蔵の戲單について

愛知淑徳大学（非） 中 塚 亮

青木文庫は、名古屋大学附属図書館のコレクションの一つで、中国文学者青木正児（1887-1964）の旧蔵書や旧蔵資料を、青木の没後ご遺族からお譲りいただいたことをその由来とする。青木正児は近代日本における中国文学研究の草創期に大きな功績を残した先駆者のひとりである。

その略歴と業績を簡単に紹介する¹。1887年山口県下関市に生まれた青木は、1908年京都帝国大学に入学すると狩野直喜・鈴木虎雄・内藤湖南らに師事する。卒業後は同志社大学教授などを経て1923年より東北帝国大学に奉職、支那学第二講座（中国文学）の初代教授となる。1928年には京都帝国大学教授となり、その退官後は山口大学などで教鞭を執り、1964年逝去。

その業績は多岐にわたり、『中国文学概説』『中国文学思想史』など文学に関するもの、『琴棋書画』『華国風味』など書画や文化考証に関するものなどの他、中国文化に関する雑文や紀行文もあり、きわめて博学多才である。

また、1920年には「胡適を中心に渦巻いてゐる文学革命」を発表するなど、魯迅や胡適の日本における最初期の紹介者でもあり、新しい文学革命の動向を日本に伝える役割も果たしている。

中でも、戯曲研究はその代表的なものであり、とりわけ、王国維『宋元戯曲史』の後を継いで明清代の戯曲史をまとめた『中国近世戯曲史』（1930年出版）は国内外を問わず、中国古典戯曲研究に大きな影響を与えた。中国でも発表同年に紹介され、1933年には鄭震節訳本が、1936年には王古魯完訳本が出版されている²。青木は同書によって京都帝国大学より博士号を授与されている。

青木文庫にも、これらの研究を支えた貴重な書籍があり、中には王国維や胡適・梅蘭芳らから贈られたその著書も含まれている。書籍以外にも、ノートや原稿類³、年画⁴、演劇のレコ

¹ 「年譜」『青木正児全集』10,春秋社,1984、により整理

² 『中国近世戯曲史』の中国における受容と反応については、汪超宏「一个日本人的中国戏曲史观—青木正児《中国近世戏曲史》及其影响」『戏剧艺术』2001年第3期（总101期）がくわしい

³ ノートについては、以下の論文で紹介されている

張小鋼「青木正児博士の「名物学」と名古屋大学図書館の青木文庫」『名古屋大学中国語学文学論集』6,1993

張小鋼「資料 青木正児博士ノート（一）」『名古屋大学中国語学文学論集』6,1993

張小鋼・渡辺幸彦「資料 青木正児博士ノート（二）（三）」『名古屋大学中国語学文学論集』7、8,1994、1995

ード⁵のほか、旅行先でのレシート類やお茶の包み紙までさまざまな資料が収められている⁶。

今回は、これらの資料の中でも戯単について紹介したい⁷。

青木文庫には青木正児が収集した戯単 29 枚を、台紙に貼り一冊に綴じた『戯単』という冊子が収められている。その内訳は、青木が文部省の在外研究員として中国に滞在中に収集したもの 28 枚、及び韓世昌の来日公演分 1 枚となっている。

青木は 1925 年（大正 14 年）3 月 26 日に下関を発ち、釜山に上陸、ソウル（京城）・平壤・瀋陽（奉天）を経て北京に入り、東四・六条胡同の本願寺別院に住んだ⁸。戯単は遺っていないが、はやくも 4 月 8 日には三慶園で恩曉峰・十三旦を観た記録がある⁹。青木が腰を落ち着ける間もなく、すぐに芝居を見に行っている様子が見える。

戯単の収集は 4 月 12 日から始まっている。翌年 3 月 18 日に北京を離れ一時帰国するまでに、北京では 17 枚の戯単を遺している。ただし、このことはこの 18 公演しか見ていないことは必ずしも意味しない。例えば青木は北京の慶楽園・三度園（三慶園のあやまりか）・広和楼の名を挙げて「是等の劇場は余も嘗て之を目撃して略ぼ記憶に存」す、と記しているが¹⁰、慶楽園・広和楼の戯単は『戯単』に収録されていない。（なお、青木が北京に行ったのは在外研究の際のみである）

青木はあまり自身の観劇経験について記していないが、その中から一文を紹介する。

私は韓世昌の芸について多くを知らない。只一度北京の開明戲院で或る救済金募集のために演芸会が開かれた時、その『春香鬧学』一齣を見たばかりである。……私は彼を見る二箇月程前に、同じ開明戲院で梅蘭芳の『春香鬧学』を見てその印象がまだ新たな時であつたからして、ひそかにこの二名伶の芸を比較しながら見る事が出来た。そして只一度で

渡辺幸彦・張小鋼「名古屋大学青木文庫所蔵『鼓東雜録』『借讀鈔存』について」『名古屋大学中国語学文学論集』7,1994

⁴ 中塚亮「青木文庫蔵図像資料目録」『名古屋大学中国語学文学論集』21,2009、参照

⁵ 中塚亮「青木文庫所蔵 SP 盤レコード目録稿」『名古屋大学附属図書館研究年報』8,2010、参照

⁶ 杉山寛行・張小鋼「青木正児博士とその資料（上）（中）」『名古屋大学文学部研究論集（文学）』46、48,2000、2002、参照

⁷ 戯単の詳細については、論者が作成した目録（「青木文庫蔵戯単目録」『名古屋大学中国語学文学論集』20,2008）を参照されたい

また、戯単の画像は名古屋大学附属図書館ホームページにて公開されている
<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/wakan/slideshow/slideshow.html#11658114>

戯単も含む青木文庫の戯曲関連資料の全容については、李莉薇が論じている。（李莉薇『近代日本対京剧的接受与研究』第 8 章第 4 節「青木文庫所蔵演剧资料与京剧」，广东高等教育出版社，2018）

⁸ 渡中の日にち、経路については「年譜」（『青木正児全集』10）による。住居については、吉川幸次郎「解説」（『青木正児全集』7,春秋社,1970,p.597）による

⁹ 『戯単』への書き込みによる

¹⁰ 青木正児「支那近世戯曲史」『青木正児全集』3,春秋社,1972,p.461

韓世昌のじつくりとした芸風に傾倒してしまった¹¹。

ここに引く梅蘭芳（5/17）・韓世昌（7/28）の両公演についてはいずれも戲單が遺されている。青木は梅蘭芳は好まなかったようで、北京滞在中に『北京週報』（1926年1月）に書いたコラムの中で、「今の世に時めく梅某が凸坊の玩具の笛めくパイ／＼など聴きたくも無し。梅某が妹婿とやらの徐某（論者注：徐碧雲）が蚯蚓声のお伽芝居、あんなものが人気を呼ぶとはさても／＼馬鹿者の多き北京なるかな」と厳しい評価をする一方で、「それよりも、つゝましやかな程艷秋のしつくりした 做工 と、愁を含んだ 嗓子 の潤ひ、あれはきつと物になること疑ひ無し」と程艷秋を賞賛している¹²。青木は11月から12月にかけて程艷秋を3回（11/14、11/22、12/12）見ており、このコラムはまさに青木の中でその評価が高まっている中で書かれたものといえよう¹³。

一時帰国を経て、青木は4月に今度は上海から中国に入り、7月まで江蘇・浙江・安徽・湖南などを回る。『戲單』には、その際に観劇した上海（9枚）・杭州・嘉興（各1枚）での戲單も収録されている。

とりわけ、青木の研究との関わりの上で注目すべきは崑劇伝習所の戲單である¹⁴。

青木は留学に臨んで、「之を機として戯劇の実演を観、以て机上の空想に根拠を与へんと志せり」との思いを抱いていた。ここで青木が見たがっていたのは、「今劇場に於て……明清の曲は尚ほ行はる」「明清曲は活劇なる」と述べるところの、いまなお劇場にて生き続ける明・清代の演劇作品としての「古典的な崑曲」である¹⁵。

しかし、青木の留学当時、北京ではもはや、彼が望むような「古典的な崑曲」にはほとんど触れる機会がなかった。

その渴望は「上海に滞在すること前後兩次、暇あるごと輒ち徐園に至り、蘇州崑劇伝習所の僮伶が演ずる所の崑曲を聴きて聊か生平の渴を医するを得たり」と記すように、上海においてようやく満たされたのである¹⁶。

青木は崑劇伝習所の公演を見た感想を次のように書き残している。

再び上海に還つて来ると、（崑劇）伝習所は徐園と云ふ小公演の一亭に座を移してゐた。

小さな舞台を備へた茶館である。客は三十人ばかり、茶を飲みながら曲譜を片手に観てゐ

¹¹ 青木正児「崑曲劇と韓世昌」『青木正児全集』7,p.68

¹² 青木正児「見た燕京物語」『青木正児全集』7,p.112

¹³ なお、梅蘭芳は5公演（5/17、7/28、1/21、2/7、3/6）、徐碧雲は2公演（11/25、1/21）、程艷秋は5公演（11/14、11/22、12/12、1/21、3/12）分の戲單が遺されている

¹⁴ 青木と崑劇伝習所の戲單については、赤松紀彦「七枚の戲單」（『吉田富夫先生退休記念中国学論集』汲古書院,2008）にくわしい

¹⁵ 青木正児「支那近世戯曲史」『青木正児全集』3,pp.3-4

¹⁶ 青木正児「支那近世戯曲史」『青木正児全集』3,p.4

る人も少くない。好きな人ばかり気持の良い集りである。私は滞在中殆ど毎日のやうに、せつせと通つた。舞台に立つのは童伶ばかりで無論喰ひ足りないものであるが、やはり典型が有つて愉快であつた。そして其れは後日私が『支那近世戯曲史』を編する上で裏付けとして役立った。それよりも大いに私に元気を付けてくれた¹⁷

「滞在中殆ど毎日のやうに、せつせと通つた」と述べるとおり、戯単によれば、青木は 4 月 11・12 日の公演を見た後、一旦は「崑劇も見たいが、江南の春は見のがせない」¹⁸と江南旅行に出かけるが、上海に戻るや崑劇伝習所が上海を離れるまで連日（5 月 2～6 日）足を運んでいる¹⁹。

また、この観劇経験は有形無形に青木の研究を支えたと考えられる。『支那近世戯曲史』中のその直接的な例を一つ挙げておく。

《鸞釵記》 余嘗て「拔眉」「探監」二齣を見るに、淨丑主演の滑稽場にして人を捧腹せしめ、其の悲劇中に在るを覚えざらしむ²⁰

『鸞釵記』を見たのは、崑劇伝習所の 5 月 3 日の公演であり、もちろんこの戯単も遺されている。このように、青木文庫に遺された戯単は近代中国演劇史の資料であるとともに、青木の研究の背後にどのような観劇経験があったかを考える上でも重要な資料だといえよう。

かくして、こののち、上海でもう 2 枚を加え、計 28 枚の戯単を遺して、青木の中国滞在は終わりを告げる。

青木文庫の戯単には 1 枚だけ帰国後のものが含まれている。1928 年（昭和 3 年）10 月 18 日から 23 日まで京都市岡崎公会堂で行われた韓世昌の公演の戯単である²¹。本公演は中国古典演劇の戦前最後の来日公演であり、同時に『戯単』に収集された最後の戯単となった。

¹⁷ 青木正児「辻聴花先生の思ひ出」『青木正児全集』7,p.346

¹⁸ 青木正児「辻聴花先生の思ひ出」『青木正児全集』7,p.346

¹⁹ 『申報』（民国 15 年 5 月 5 日）の記事によれば、崑劇伝習所は 5/7（旧暦 3/26）に上海を離れている

²⁰ 青木正児「支那近世戯曲史」,『青木正児全集』3,p.255

²¹ 本公演については、松浦恒雄「北方昆曲の一断面」『中国学志』乾,1986、中塚亮「韓世昌による崑曲来日公演とその背景について―満鉄の弘報活動との関係から」名古屋大学附属図書館研究年報 (6), 2007、参照